

令和 8 年度第 1 回
福島県原子力発電所の廃炉に関する
安全確保県民会議

日 時：令和 8 年 6 月 2 日（火曜日）
午後 1 時 3 0 分～3 時 3 0 分
場 所：杉妻会館 4 階 牡丹の間

【事務局】

定刻となりましたので、ただいまから令和8年度第1回福島県原子力発電所の廃炉に関する安全確保県民会議を開催いたします。

本日、司会を務めます福島県原子力安全対策課の菊地と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

本会議につきましては、インターネットによる動画配信を行っておりますので、ご承知おきください。

傍聴される皆様におかれましては、お配りいたしました留意点をお守りいただきますよう、ご協力を宜しくお願いいたします。

初めに、福島県危機管理部次長の濱津よりご挨拶申し上げます。

【福島県危機管理部 濱津次長】

皆さん、こんにちは。福島県危機管理部次長の濱津と申します。

皆様には、お忙しい中、本会議にご出席いただき、感謝申し上げます。

本日は今年度第1回目の会議となりますが、本日の会議では、ALPS処理水海洋放出の昨年度の実績と今年度の計画、また、2号機で今後実施されます、ロボットアームを使用した原子炉格納容器の内部調査や燃料デブリの試験的取り出しの実施方法、さらには、今年3月に3号機で実施されましたマイクロドローンによる原子炉格納容器の内部調査の結果などについて確認する予定としております。

東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所の事故から15年余りが経過し、被災地域におきましては、生活基盤となる施設の整備が進んでおり、また、先月には復興祈念公園が開園し、周辺には民間施設もオープンするなど、新たな人の交流が期待されているところでございます。

このように、本県が復興に向けて歩みを進めていく上での大前提となるのが福島第一原発の廃炉作業が安全かつ着実に進められることとございます。

国及び東京電力におきましては、引き続き安全を最優先に着実に廃炉作業を進めるとともに、作業の進捗状況や今後の取組等について、県民目線に立った分かりやすい説明、分かりやすい情報発信をお願いいたします。

引き続き、会議構成員の皆様とともに、廃炉に向けた取組状況を確認してまいりたいと考えておりますので、忌憚のないご意見をくださいますようお願いいたしまして、私からの挨拶といたします。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

【事務局】

本日の出席者につきましては、お手元の出席者名簿をご覧ください。

本日は、関係市町村の住民から12名、各種団体から5名、学識経験者3名の計20名の方にご出席をいただいております。

なお、出席者のご紹介につきましては、出席者名簿の配付をもって代えさせていただきます。

次に、配付資料の確認をお願いいたします。本日の資料につきましては、次第裏面の配付資料一覧に記載しております。

不足の資料などがございましたら、会議の途中でも結構ですので、お近くの事務局職員までお知らせください。

本日の会議の終了時刻は、午後3時30分頃を予定しております。

なお、本日のご発言に当たりましては、オンライン参加者が聞き取れますように、必ずマイクをお使いいただきますようお願いいたします。

ご質問などの際には職員がマイクをお持ちしますので、挙手にてお知らせください。

議事の進行につきましては、県民会議設置要綱に基づきまして、議長の福島大学教授、牧田実先生にお願いしたいと思います。

それでは、牧田先生、よろしくお願いいたします。

【牧田議長】

それでは、議事に入ります。

議事、東京電力福島第一原子力発電所の廃炉に向けた取組の進捗状況等について、東京電力から説明をいただきます。

質疑については、説明後、一括してお受けいたします。

東京電力から説明をお願いします。

【東京電力福島第一廃炉推進カンパニー 小野プレジデント】

東京電力ホールディングス福島第一廃炉推進カンパニーの小野でございます。

いつも福島第一原子力発電所の廃炉作業にご理解、ご協力を賜っております。本当にありがとうございます。本日は、本年2月に開催されました前回会議以降の廃炉作業の進捗、取組につきましてご説明をさせていただきます。

ぜひ忌憚のないご意見をいただければと思います。

失礼ですが、ここから着席にて説明をさせていただきます。

私からは、本日ご説明させていただく内容から、ALPS処理水の海洋放出、そして、マイクロドローンを使った3号機原子炉格納容器の内部調査についてご説明をさせていただきます。

まず、ALPS処理水の海洋放出につきましてですが、本年2月に行われました前回会議におきまして、2026年度のALPS処理水海洋放出の計画素案をご説明させていただきましたが、地域の皆様から、万全を期した上で放出回数を増やすことをきちんと説明をして進めてほしいといった声、また、引き続き安全対策をおろそかにすることなく、緊張感を持って作業に取り組んでいただきたい等、それぞれのお立場からご意見をいただいております。

頂戴いたしましたご意見も踏まえた上で、2026年度は、素案のとおり、全8回の放出を行う予定にしております。

昨日、6月1日より、本年度第2回目の海洋放出を開始しております。引き続き緊張感を持って、安全を最優先に取り組んでまいります。

続きまして、マイクロドローンを使った3号機原子炉格納容器内部調査についてでございますが、当社は2024年11月に2号機から燃料デブリの試験的取り出しを初めて行っておりますが、本格的な取り出しは3号機から行う計画としてございます。本格的な燃料デブリの取り出しに向けましては、原子炉格納容器内のさらなる情報収集が不可欠でございまして、本年3月にマイクロドローンを用いた3号機原子炉格納容器内の内部調査を実施しております。調査では、燃料デブリを取り出す際のアクセスルートとなり得る格納容器の貫通孔、また、原子炉圧力容器底部付近の状況などを確認することができています。

前回会議におきまして、燃料デブリ取り出しは専門的で難しいというお声を頂戴いたしました。本日は、調査結果をまとめた映像と原子炉格納容器の模型も準備しております。皆様のご理解がより一層進むよう、丁寧にご説明をしたいと思います。

それから、本日の議事には含まれてございませんが、2号機の使用済み燃料プールからの燃料取り出しについて若干触れさせていただきます。

本年3月までに2号機使用済み燃料プールから燃料を取り出すために必要な設備の設置、試運転、検査が完了し、3月25日から訓練を進めてきましたが、準備が整いましたことから、本日、6月2日より取り出しに着手をしております。

本作業に当たりましては、当社社員が燃料取り出し作業やメンテナンス作業の中核者としてリーダーシップを発揮できるよう、設備の設計段階からメーカーに出向し、力量向上を図ってまいりました。

出向した社員につきましては、訓練計画の立案、また訓練の講師、それから燃料取り出し手順の作成を主導的に担うなど、当社とパートナー企業とのワンチーム化の一助となっていると考えてございます。

使用済み燃料プールからの燃料取り出しは廃炉作業の中でも重要な工程でございまして、一つの作業に高い安全性が求められてございます。作業に当たりましては、事前の手順確認を十分に行い、安全を最優先に行動する姿勢を徹底いたします。

引き続き、関係者全員で緊張感を共有しながら、安全かつ着実に作業を進めてまいります。

それでは、ここから、お手元の資料に沿いまして、廃炉コミュニケーションセンター副所長の桑島からご説明をさせていただきます。

【東京電力福島第一廃炉推進カンパニー 廃炉コミュニケーションセンター 桑島副所長】

東京電力の桑島と申します。よろしくお願いいたします。

配付させていただいております、あと正面にも投影させていただいておりますが、この福島第一原子力発電所廃炉作業の取組に関するご報告という資料のご説明になります。

開きまして、1ページ目をお願いいたします。福島第一原子力発電所におけます廃炉の主な作業項目と作業ステップを示してございます。

まず、使用済み燃料プールからの燃料取り出しにつきましては、既に3・4号機で完了してございます。燃料デブリの試験的取り出しにつきましては、2024年9月に着手しまして、この中長期ロードマップにおける目標工程であります初号機の燃料デブリ取り出しの開始というのを達成してございます。

引き続き、1・2号機燃料取り出しや1・3号機燃料デブリ取り出しの実施に向けて、順次作業を進めてまいります。

2ページ目をお願いいたします。廃炉につきましては、地域の皆様や環境への放射性物質によるリスクを低減する作業でございまして、主な取組は、ここに記載してあるとおり、5つあると考えてございます。

本日は、このうち、4番のALPS処理水の放出状況と、2番の燃料デブリ取り出し関連となります2号機PCV内部調査・試験的取り出し作業、3号機PCV気中部調査（マイクロドローン調査）についてのトピックを今回ご報告させていただきます。

次に、3ページ目をお願いいたします。まずは、ALPS処理水の海洋放出の実績と今後の計画からご説明いたします。

次に、4 ページ目をお願いいたします。このうち、A L P S 処理水の放出実績と計画についてでございます。

次に、5 ページ目をお願いいたします。本ページのA L P S 処理水の海洋放出の流れは、これまでもご説明しておりますので、説明は省略させていただきます。

次に、6 ページ目をお願いいたします。A L P S 処理水の海洋放出につきましては、2023年8月の放出開始から約2年が経過してございまして、2025年度は7回、通算18回の海洋放出を実施してございます。2025年度の総放出量は約5万5,000m³、トリチウムの放出総量は約16兆ベクレルとなっております。

次のページをお願いいたします。7 ページ目に、ご参考としましてA L P S 処理水の海洋放出を停止させる場合の自然現象について記載しております。これまでと変更がないために、説明に関しましては省略させていただきます。

次の8 ページ目をお願いいたします。2026年度の放出計画につきましては、従前どおり、トリチウム濃度の低いものから放出を行うことを原則としておりまして、今年度は放出回数8回、総放出量6万2,000m³、年間トリチウム放出量は約11兆ベクレルとなっております。

これまでの運用実績をもとに作業の効率化を進めた結果、測定・確認用タンクへの受入れ、タンク間移送でございますが、それと分析期間を短縮できる見通しが立ったことにより、放出と放出と間の期間短縮が可能になったということで、2026年度の放出回数は前年度から1回増やして8回を予定してございます。

現在は、この赤い囲みのところ、2回目でございますが、今年度2回目で通算20回目の放出を昨日6月1日から開始してございます。

9 ページ目をお願いいたします。海域モニタリングのトリチウムの分析も継続して実施しております。こちらの概要についてはこれまで説明しておりますので省略いたしますが、実績としまして、現在まで、当社の放出判断レベルの発電所から3キロ以内、この絵のところですが、こちらの1リットル当たり700ベクレル、あと発電所正面の10キロ四方内、1リットル当たり30ベクレルを全て下回っていることを確認しております。

10 ページ目をお願いいたします。こちらも、これまで同様に海水中のセシウム137濃度変化を示しているものですが、右側のグラフで示してございますとおり、これまでの海水モニタリングで観測された過去の変動範囲と同等の値で推移していることが示されてございます。

次に、11 ページ目をお願いいたします。2023年8月のA L P S 処理水の放出開始から本年5月14日までの間に、合計14万9,020m³のA L P S 処理水の放出を実施しました。また、放出開始以

降のALPS処理水の新規発生量が6万979m³となっておりまして、ALPS処理水等の貯蔵量は、このタンクの図に示したとおり、放出前に比べて約7%、これは8万8,000m³分でございますが、減少してございます。

なお、最新情報につきましては、右下に二次元コードが複数のページにわたって記載してございますが、この二次元コードも示しておりますので、当社ホームページの処理水ポータルサイトでも確認いただけるようになってございます。

次に、12ページ目をお願いいたします。次は、IAEAによるレビューの説明となります。

次に、13ページ目をお願いいたします。本年4月30日に、ALPS処理水の海洋放出後5回目となりますIAEAタスクフォースによる安全性レビューミッションの報告書が公開されております。報告書では、これまでと同様に、関連する国際安全基準の要求事項と合致しないいかなる点も確認されなかったと結論づけられてございます。

14ページ目をお願いいたします。本年5月11日から15日の間で、IAEAタスクフォースが来日しまして、海洋放出開始から6回目となる安全性レビューミッションが行われております。このタスクフォースは、ALPS処理水の海洋放出に関連するモニタリングにつきまして、技術的事項を議論するとともに、福島第一原子力発電所の現地調査を行っていただいております。

15ページ目をお願いいたします。今回の安全性レビューにつきましては、本年5月15日にIAEAよりプレスリリースが発信されてございます。IAEAプレスリリースでは、安全性レビューミッションの結果としまして、国際安全基準の要求事項と合致しないいかなる点も確認されず、2023年7月4日公表の包括報告書に記載された安全性レビューの結論を再確認したと報告されてございます。当社は引き続き安全確保に万全を期すとともに、レビューの内容について透明性高く発信していきます。

16ページ目をお願いいたします。本年5月29日、IAEAの枠組みのもとでの追加的モニタリングの一環としまして、IAEA関係者及び中国、韓国、ロシア、スイスの分析機関の専門家による測定・確認用タンクからの海水希釈前のALPS処理水の採取が行われております。写真のとおりでございます。

次に、17ページ目をお願いいたします。次は情報発信の説明についてとなります。

18ページ目をお願いいたします。ALPS処理水に関する様々な関連情報を処理水ポータルサイトに集約しまして、情報公開を継続しております。なお、本サイトは日本語だけでなく、英語、中国語、韓国語のように多言語化して公開してございます。

19ページ目をお願いいたします。海域モニタリング結果につきましても、関係箇所が実施して

いるデータを一元的に閲覧することができる包括的海域モニタリング閲覧システム（ORBS）を公開してございます。このサイトも多言語化して公開してございます。

20ページ目をお願いいたします。継続的に実施している情報発信として、新聞広告やラジオ広告の実施、皆様の声を直接拝聴する視察・座談会や意見交換会なども継続して実施しております。

21ページ目をお願いいたします。人の動きが活発化するゴールデンウィークに合わせて、福島県内だけでなく、札幌から博多までの主要ターミナル駅におきまして、海洋放出の安全性に関する広告を掲載しております。

次に、22ページ目をお願いいたします。首都圏を中心に、福島県内のイベントでも、多くの皆様に福島県産品の魅力を発信してございます。下に写真等を示してございますが、今年実施した実績を表示してございます。

23ページ目をお願いいたします。敷地確保に向けたタンクの解体についてご説明いたします。

24ページ目をお願いいたします。処理水の貯蔵に使用しなくなったタンクの解体につきまして、これまでも説明させていただいておりますが、解体により廃炉に必要な施設を建設する敷地を確保する計画でございます。写真にあるとおり、昨年9月3日にJ9エリアタンク12基の解体が完了してございます。

25ページ目をお願いします。J8エリアタンクにつきましては、本年1月20日より解体作業に着手しまして、4月10日に全9基中5基のタンクの解体が完了してございます。6基目のA2タンクの解体につきましては、4月13日に着手しておりますが、5月から10月までの気温の高い時期は作業を中断するという事で、11月頃に作業を再開する予定でございます。

26ページ目をお願いいたします。Eエリアでは、事故当時に急増した汚染水を急ぎ貯蔵するために、組立てが容易なフランジ型タンク、この写真にございますとおり、ボルトで接合するタイプのタンクを334基設置しておりましたが、漏えいリスクの低い溶接型タンクへの切替えを行い、2019年3月に切替えが完了してございます。フランジ型タンクの解体を進めておりまして、残り1基となっております。このEエリアのD1タンクにつきましては、タンク内のスラッジ回収及び除染・洗浄作業が完了しておりまして、本年5月12日よりタンクの解体に着手してございます。解体の完了は6月上旬を計画してございます。

27ページ目をお願いいたします。汚染水対策についてご説明させていただきます。

28ページ目をお願いいたします。汚染水の発生量を減らすことで、保管・管理する水の総量を抑制し、万が一の漏えい時などの環境影響リスクを低減する目的で、建屋周辺のフェーシングや建屋間ギャップ止水等の汚染水発生量抑制対策を実施してございます。こちらのグラフで示して

いるとおりでございますが、2025年度、右側ですが、この汚染水発生量は1日当たり約60m³となつてございます。2025年度の降水量は平年より少なかったのですが、平均的な年間降水量で仮定した場合でも、汚染水発生量は1日当たり約70m³と推定してございます。

このため、2028年度内に汚染水発生量を1日当たり50から70m³以下に抑制するという目標工程を3年前倒しで達成しました。

こちらの説明は以上となります。

【牧田議長】

ありがとうございました。

多岐にわたる内容の概括的な説明だったと思います。ALPS処理水、IAEAによるレビュー、情報発信について、タンクの解体について、それから汚染水対策ですね。

今年度最初ということで、初めての方もいらっしゃるかと思いますが、県民の視点で素人感覚を生かしながらモニタリングをしていく、疑問点について質していくというのがこの会議の趣旨ですので、どうぞ遠慮なさらずご発言いただければと思います。

どうでしょうか、ご意見、ご質問ございますでしょうか。どうぞ。

【福島県観光物産交流協会 守岡理事長】

説明ありがとうございます。何点か確認させていただきたいんですが、まず6ページと8ページ、こちらはトリチウム濃度の低いものから放出を行うという原則があつて、昨年度は5万5,000m³に対して16兆ベクレルのトリチウム総量だったんですが、今年度は6万2,000m³に対して11兆ベクレルのトリチウムということで、量が増えているのにトリチウム総量が減っている。

昨年度と比較して、このトリチウム量の違いというのは、何なのかということですね。

今後、増えはしないのか、まず1点目ですね。

続いて、IAEAによる安全性レビューのところで、16ページですが、IAEA関係者及び中国、韓国、ロシア、スイスの専門家による採取が行われたと書いてあるんですが、IAEAの関係の方と中国、韓国、ロシア等の方々の発言内容に違いがあつたのか、それぞれ中国、韓国、ロシアの方はどんなご発言をなさっていたのか、お分かりであれば教えていただければと思っております。

続いて最後なんですが、タンクの解体についてですが、解体したものの自体は、どのような保管で、どのような処分工程になっているのか、改めて教えていただければと思っています。

以上3点です。

【東京電力福島第一廃炉推進カンパニー 廃炉コミュニケーションセンター 桑島副所長】

東京電力の桑島から、まず1点目のご質問ですが、トリチウム濃度の違いというのは、基本的に我々としてはトリチウム濃度の低いものから放出を行うと、8ページに書いてございます。こちらが我々としての原則としてございます。ですので、長い目で見ますと、今後トリチウム濃度を我々22兆ベクレル以下にするというのを目標にしておりますので、この範囲の中で、次第に濃度が上がっていく可能性はございます。この年度で、2025年度と2026年度を比べると、確かに2025年度のほうがトリチウム総量が高いということになってございますが、これはタンクの放出の順番を決めるときに、必ず低い順番というのはなかなか組み替えることができない場合もございますので、そういった意味で、今回につきましては2026年度が低い値になっておりますが、基本の我々の方針としてはトリチウム濃度の低いものから放出を行うということでご理解いただければと思います。

【福島県観光物産交流協会 守岡理事長】

たまたまという事ですか。

【東京電力福島第一廃炉推進カンパニー 廃炉コミュニケーションセンター 桑島副所長】

たまたまというより、そういう管理の仕方でございますが、そういったところで違いがあるということでございます。

3番目のタンクの解体を先にお話しさせていただきますが、24ページとか25ページ、25ページのほうがいいかもしれません。こちらのJ9エリアとJ8エリアのタンクの解体につきまして、こちらのタンクはもともとALPS処理水、もしくはALPS処理途上水という非常に汚染の低いものを保管してございまして、こちらにつきましては、タンクの切断に関しましては放射性のダストとかを実際に事前に汚染をしっかりと調べた上で、ある意味、外で養生なしで切断等はしてございます。基本的には、そういった意味では汚染の非常に低い金属と考えていただければと思います。こちらの非常に保全レベルの低い金属につきましては、今コンテナに収納しまして、屋外の一時保管エリアで、屋外の一時保管エリアも汚染の状況によって線量が高いものとか低いものを分けて、あと種類別に、金属とかコンクリートとか、そういった種類別に分けたりしても保管してございますので、今、屋外に一時保管してございます。

将来的には、構内で今、金属の溶融炉等をつくる予定でございますので、そういったところで溶融して減容化していくという計画でございます。

2点目、I A E Aの各国のお話ですが、私、今、手持ちでコメント等については持ってございませんが、総括的な話で言いますと、特にそういう批判するような話があったというのは聞いておりません。

以上でございます。

【福島県観光物産交流協会 守岡理事長】

ありがとうございます。

【資源エネルギー庁 加賀原子力発電所事故収束対応室長】

よろしければ、2点目のI A E Aのところ補足させていただきます。

今、東京電力からご説明のとおりで、特に分析の専門家のご発言というよりは分析の結果として、これまでの結果として異常な数値が出ているとか、そういったことはなくて、中国の分析結果も特に異常がないということでございます。

【福島県観光物産交流協会 守岡理事長】

明確に異常はないという事ですか。

【資源エネルギー庁 加賀原子力発電所事故収束対応室長】

はい、I A E Aでそういうものをまとめて公表してございます。

【福島県観光物産交流協会 守岡理事長】

それは、それぞれの国の中でオープンになっている内容ですか。

【資源エネルギー庁 加賀原子力発電所事故収束対応室長】

I A E Aに報告がされまして、I A E Aのほうでそういった結果をまとめて公表しているものでございます。今回、5月29日のものは出ていないんですが、これまでのもので結果が出ているものについては、そういう異常な結果は出ていないということでございます。

【福島県観光物産交流協会 守岡理事長】

I A E Aで総括して結果を報告していて、なお、専門家がそれぞれの国で発言したという事実はないですか。

【資源エネルギー庁 加賀原子力発電所事故収束対応室長】

それぞれの国の分析結果を全て並べて、I A E Aで公表しています。

【福島県観光物産交流協会 守岡理事長】

ありがとうございます。

【牧田議長】

ほかにございますか。よろしいでしょうか。どうぞ。

【福島県老人クラブ連合会 鈴木会長】

大阪とかで広告を出されたということですが、その反応はどうだったのでしょうか。

【東京電力福島第一廃炉推進カンパニー 廃炉コミュニケーションセンター 桑島副所長】

東京電力の桑島と申しますが、我々、こういう各地で表示したときに、現地に行って確認等していますが、特にその場で何か声をかけられて話をされたということは聞いていませんが、そんなに我々の問合せ状況としまして、こういうのが問題だというような問合せ等はございませんので、各地、どこに表示しても国内ではしっかり見ていただいている、一定の効果があると考えてございます。

【福島県老人クラブ連合会 鈴木会長】

分かりました。ありがとうございます。

【牧田議長】

ほかにいかがでしょうか。

【国立大学法人埼玉大学 村山客員教授】

今の点に関連するんですが、情報発信については様々な取組、本当によくされていると感じております。

20ページにも、意見交換会あるいは視察・座談会をされているということで、今期は2月から4月末まで450回程度されているということ、本当はかなり労力をかけて進めておられるということによく分かりました。

ただ、一方で、情報発信は大事だと思うんですが、それによってどういう反応があったのか。感想とか、多分いろいろと聞いておられるのではないかなと思うんですが、この点についてどういうふうに整理をされようとしているのか。たしか前回も同じようなことを私申し上げたと思うんですが、やはりコミュニケーションというのは、発信だけでなく受信側もしっかりと受けながら今後の発信を考えていく、そういうフィードバックを求めていく中で改善されていくと思うんですね。

恐らく現場の方はそういう声を聞きながら日々改善されていると思うんですが、これまであまりその情報が県民会議では出てこなかった。もしかすると全くなかったような気もするんですが、そのあたりについて今後どういうふうにお考えなのか、ぜひ方針だけでも伺いたいと思っております。以上です。

【東京電力福島第一廃炉推進カンパニー 小野プレジデント】

東京電力の小野でございます。貴重なご意見ありがとうございます。

我々としても、様々な場で、例えば座談会含め、場合によったら視察に来ていただいた方からいろんなご意見を伺ったりということでやってございます。そういう中で、我々としても1回、どんなご意見があったか、場合によったらそこら辺、アンケートみたいなものがとれるかどうか分かりませんが、そういうものには、今後一生懸命チャレンジしていこうかなと思ってございます。

また、その結果等につきましては、何らかの形でこういう県民会議の場等でお話ができればと考えてございます。

もう少しお時間をいただければと思います。よろしくお願いいたします。

【牧田議長】

はい、どうぞ。

【福島県商工会議所連合会 安達常任幹事】

商工会議所連合会の安達と申します。

今の情報発信の件で1つご報告というか、実は昨年の秋に、兵庫県、阪神・淡路から30年たちましたので、福島県商工会議所連合会と交流しておりまして、そこの専務理事の方20名が福島第一原子力発電所サイトに入られました。いろいろお世話になりまして、ありがとうございます。

そこの反応として、福島から遠い地域ほど、この情報、この辺の原発の情報がないという話をされておりまして、こんなに安全に入れるんだなというふうに、サイトは入りましたので、話しておられました。一方で、廃炉の現場をご覧いただきましたので、これからまだまだかかるんだというのを感じましたというようなお話をいただきました。

このような形で私どもは交流しているので、声が届いているので、こういう場でちょっとフィードバックさせていただきたいということと、あと来年、実は広告業協会という全国の大きな新聞社、テレビ局の全国大会が福島県で開催されます。これはマスコミ、新聞社の社長さんとかテレビ局の会長さんとか、そういう方も来られます。ここで商工会議所も中心になってこの会議を進めているんですが、全国から1,000人の方が来られて、それで会議をやった後にエクスカージョンがあつて、浜・中・会津で今考えておりますが、そのうちの一つ、浜通りでサイトに入れていただこうと今交渉しております。それなので、そういった方の声をぜひ来年、東京電力のほうでも、私どものほうでも集約をしたいと思いますが、ぜひとも聞いていただくなりして、風化しているようなことがないように、安全であることをまず全国にPRするのはやっぱりサイトに入ってもらうのが一番の風評対策だと思います。これだけのいい機会がございますので、そこをしっかりと捉えて、どんな反応なのか、どういうふうに報道機関の方が見られるのか、その辺を隠さず世界に発信できればと思っておりますので、今後、情報交換をよろしくお願いしたいと思います。以上です。

【東京電力福島第一廃炉推進カンパニー 小野プレジデント】

東京電力の小野でございます。ありがとうございます。

我々も、実はこの福島から遠いところの情報発信というのは結構苦勞しているところがございます。やはり、どうしても距離というのが意外と情報を阻むようなことがあると思いますので、今お話いただいた、そういう大会が開かれるということですので、これは我々もぜひ積極的にご協力させていただくというか、むしろ我々のほうからお願いしたいところだと思っております。

そこら辺、情報の発信、様々やっていく中で、こういう大会等が開かれることは我々にとって

も非常にいい機会でございますので、この機会を捉えて、しっかりと我々も正確な情報を分かりやすく伝えるということも今から準備を進めてまいりたいと思います。ありがとうございます。

【牧田議長】

よろしいですか。サイトというのは原子力発電所ですね。どうぞ。

【田村市 渡辺 興浩】

田村市から来ています渡辺と申します。宜しくお願い致します。

資料28ページの、汚染水の発生量の低減についての説明の中で2015年度から2025年度までに発生量が1日平均60m³ということで、発生当時の一番多い時から8分の1程度までに減少しています。

汚染水が発生したとき、周りの地区住民は、今後どんどん増えていくのではないかという心配がありました。10年間でこれだけ減らしたという過程には、凍土壁以外にもいろんな努力があったのだらうと推測致します。

具体的にここ3年でマイルストーンを3年前倒しして達成しましたという説明がありましたが、これは単に降水量が少ない為なのか、それとも毎年出る量は一定だと思われますが、それと相まって、年間の降水量によって前後するのか、そういったことを踏まえて、この数年間でこういった努力があったか、ご説明頂ければ有難いです。

【東京電力福島第一廃炉推進カンパニー 廃炉コミュニケーションセンター 桑島副所長】

東京電力の桑島と申します。

まず、ここの28ページの資料を見ていただきたいと思います。今、ここ最近の話だったんですが、少し昔の話をさせていただきますと、2015年頃から陸側遮水壁といいまして、マイナス30度の冷媒を土の中に地下30mまで通しまして、凍土壁、氷の壁を1から4号機の周りにぐるりと1.5キロぐらい壁をつくって、外側から地下水が入ってこないように対策をしております。

こういうことをしまして、大体、今、2015年あたりだと490だったんですがそれが、それが400となり、220になり、ここは結構大きいものでございました。

そのほかに、この文章の中にもございますが、2行目のところに、周辺建屋のフェーシングというのがございます。これはもともと土が見えているところが結構あったり、斜面でもあったんですが、こういったところをコンクリートみたいなもので、吹きつけですが、覆うことによって、

土の中に雨が降っても浸透しない。要は雨水が地下水にならないように表面だけ流して、雨水として処理をするということ。

あと、建屋間ギャップ止水というのは分かりづらいと思うんですが、それぞれの建屋というのは別々に建てておりますので、必ず隙間があります。その隙間に雨が降ったり、地下水が来ると入り込みまして、建屋同士は配管とかでつながっておりますので、そういった配管の接合部から水が中に入ってくる、建屋の中に入ってくるようなことがございますので、そういったギャップのところに水が入らないように、ある意味蓋をするようなイメージとかをやってきてございます。

そういったところで、少しずつ汚染水の発生抑制をしてございます。

最近ですと、1号機に大型カバーといって白い大きい屋根をつけましたが、あれも雨が降ったときに1号機の原子炉建屋の中に雨が入らないので、そういった汚染水の発生を抑制しているというものでございます。

ここ近年で言いますと、それぞれ地道な取組ですので、なかなか効果が、割合で言いますとそんなに大きくは下がってございませんが、少しずつ汚染水の発生量は減っているというものでございます。

雨の影響でございますが、先ほどもお話をさせていただいたとおりでございますが、2025年度の汚染水発生量につきましては1日当たり60m³でございました。

これが平年の降水量、ここに書いていますとおりですが、2025年度の降水量は大体1,330ミリぐらい、それが平均的な降水量ですと1,470ミリぐらいでありましたので、この平均的な降水量、雨が降ったと仮定した場合には、大体、2025年度は60から10m³増えまして70m³になると想定をしておりますので、雨が仮に普通より多かったり少なかったりしても、その振れ幅というのは大体プラスマイナス10、多くても20ぐらいだと思いますので、我々の平均的な降雨に対して汚染水発生量50から70m³以下に抑制するという工程は、今回、3年前倒しで達成したと考えてございます。

以上でございます。

【牧田議長】

よろしいでしょうか。どうぞ。

【川内村 遠藤 眞一】

川内村の遠藤と申します。

A L P S 処理水の放出が順調に進んでいるように見えますが、11ページ、今、総量の7%が減

少と。処理を始めてから大体2.7～8年経過しているんですが、2.7～8年で7%、そして減少量が8万8,000m³、まだ残っているものが124万8,000m³が残っている。ざっと計算してみたんですが、2.7～8年で7%の減少。残っている量がどれぐらいかかるかという、大体35～6年かかる計算になります。これは計画どおりと考えてよろしいですか。

【東京電力福島第一廃炉推進カンパニー 廃炉コミュニケーションセンター 桑島副所長】

東京電力の桑島と申します。

こちらは、我々としては、ALPS処理水の放出回数、今年度は、昨年度の7回から8回に増やさせていただいておりますが、この22兆ベクレルというトリチウムの総量を超えない範囲で我々としては放出したいと考えてございます。ある程度、これまで公表させていただいた資料の中では、この22兆ベクレルの範囲内で2051年までに全て放出するというシミュレーションをさせていただいておりますので、我々としては技術的には可能と考えてございます。この同じペースでやるというよりは、我々いろいろ工夫しながら、22兆ベクレルの総量を超えないようにしながら、回数を例えば増やしてみたりとかというようなことをさせていただければと思います。

【川内村 遠藤 眞一】

新たな汚染水の発生、3年前倒しで達成できたということで、そういったALPS処理水の放出とか、あるいはそれらの処理とか、それが前倒しできるのであれば前倒しすることなんですね。

私、現場を遠くから眺めていて、どうしてもあのタンク群が、あれだけタンクがあって、前も思ったんですが、あのタンク群を見ると、さあ皆さん帰ってきてくださいと言われても、何でこんなにタンクがいっぱいあって、そこに帰って本当に大丈夫なのか、あのタンクが破れたらどうするんだと、大きな地震が来てタンクがひっくり返ったらどうするんだと、余計な心配までしてしまうので、まずは一つ一つの懸念材料というんでしょうか、そういった処理水だとか、あとは、この後出てくるんでしょうが、除染土の問題とか、最終的には燃料デブリを取り出した後の処理とか、そういったことを一つ一つ前倒しできるものであれば、そういったものを前倒しして、早く環境を、住民が帰ってこられるような環境を早くつくり出してほしいなと思います。以上です。

【東京電力福島第一廃炉推進カンパニー 小野プレジデント】

東京電力の小野でございます。ありがとうございます。

我々も、当然、なかなか1Fの廃炉は、放射線の線量が高かったりして、作業員さんの健康等

も考えながらやっていかなければいけないという当然制約がございます。我々も、なるべく早い段階で地元の方々が本当に安心して生活していただけるように、1Fの廃炉をしっかりと管理をしてやっていきたいと思っています。

例えば今回、3号機の場合は、カバーをかけるときに先に瓦礫を全部撤去してからカバーをかけたということがございましたが、1号機の場合は、もう周りに本当にいろんな方々が帰られてきていますので、この瓦礫を撤去するのに、まずはカバーをかけてから、その中で瓦礫を撤去しようと。要は放射性のダストというか、ほこりが舞わない、舞っても問題のないようにしようということをいろいろ考えながらちょっと手順を変えたりしてございます。

まずは、一番大事なのは、やはり地元の方々が安心して生活していただける、そういう環境をしっかりと作り出すことだということ、これを肝に銘じて今後の廃炉作業の流れ、場合によたらどういう手順でやっていくか、しっかり考えてまいりたいと思います。ありがとうございます。

【牧田議長】

それでは、先へ行きたいと思います。

引き続き、東京電力から説明をお願いいたします。

【東京電力福島第一廃炉推進カンパニー 廃炉コミュニケーションセンター 桑島副所長】

それでは、29ページ目をお願いいたします。2号機ロボットアームによるPCV内部調査・燃料デブリ試験的取り出しの説明となります。

次の30ページ目をお願いいたします。2号機では、原子炉格納容器、我々はPCVと呼んでおりますが、このPCV内の情報を取得しまして、燃料の取り出し工法などを検討する目的で、左の図に示していますとおり、前後に伸び縮みするテレスコ式装置というもので燃料デブリの試験的取り出しを2回実施してございます。こちらはテレスコ式装置のご紹介でございますが、最初に使いましたテレスコ式装置というのは、前後に伸び縮みするものでございまして、こちらで燃料デブリの試験的取り出しを2回実施してございます。

31ページ目をお願いいたします。次にロボットアームを使いまして、PCV、原子炉格納容器の内部の調査、試験的な取り出しにつきましては、最初にやったテレスコ式同様、貫通孔X-6ペネというものの、図にも書いてございますが、この穴からロボットアームを進入させまして、内部調査や試験的取り出しを行う予定でございまして、主な目的は3つ記載してございますが、1つ目は、テレスコ式装置によりまして大型のロボットアームを進入させる際に障害となります干

渉物を切断しまして撤去する、このアクセスルートを構築するということです。2つ目は、設計や作業計画に活用するためのPCV内部の3次元データや映像を取得することです。3つ目につきましては、デジタル環境を活用しました完全遠隔オペレーション作業というものの、このロボットアームの調査を完全な遠隔でやるということと、あと高線量環境下での長期間使用による装置の実証というものです。高線量下で長期間使用しますと放射線の影響が出てきますので、これはそういう影響がないかということを確認するものでございます。

32ページ目をお願いいたします。ロボットアームの構造で模型による説明と書いておりまして、このロボットアームによる調査につきましては、今、皆様の前に25分の1の模型をご用意させていただいております。

なお、このロボットアームによる調査の詳細につきましては、実際に調査が開始された際に別途またご説明させていただく予定ですので、今回は主に全体概要につきまして、この前でご説明させていただきます。

お手数ですが、一度お席をお立ちになりまして、この模型がよく見える場所までおいでいただければと思います。

では、こちらから説明させていただきます。ここにも書いてございますとおり、2号機の原子炉格納容器の内部調査、ロボットアームを使った内部調査のイメージをご覧いただくための25分の1の模型でございます。

最初、概要を説明しますと、こちらが原子炉压力容器といいまして、原子力発電所は実際に原子燃料ですね、ここにありますが、これを使いまして蒸気を起こして発電機を回すというものでございますが、ここに燃料が入ってございます。この压力容器の外側に、さらに二重の原子炉格納容器というフラスコ型の装置がございまして、これが大体直径が、こちらが切れていますが、22mぐらいあります。压力容器の中は大体直径5.5mぐらいの大きさだと思っていただければと思います。

2号機は事故によりまして、この燃料が溶けまして、冷却機能がなくなったので溶けまして、燃料が下に溶け落ちてきたというものでございます。ただ、ここはイメージでございまして、今、中がこうなっているというものではありません。我々もまだ中を見ていませんので、大体燃料が溶けたりして中の構造物がばらばらに落ちてきているだろうという想定でございます。

原子炉格納容器のこちら側に穴が空いてございますが、これがX-6ペネトレーションというものでございます。原子炉格納容器がございまして、外側に原子炉建屋がございまして、中の圧力、運転中は圧力とか気体のガスを変えていますので、それが外に出ていかないように、大体

気密性を担保しているんですが、現在もこの中身が燃料デブリ等によってかなり汚染されておりますので、そういったガスが外に出てこないように、こういう既存の穴を使いまして、その外側にテレスコ式装置でありますとかロボットアームを設置していくと、こちらの箱は、我々はエンクロージャと言っております、実際に中に何かを入れるときに、こういう箱がないと、一度蓋を開けないといけなくなります。この蓋を開けますと、外と中がツーツーになってしまいますので、そういったことがないように、一度、外の隔離する箱を作りまして、ここに弁、仕切りをつけまして、中に物を出し入れすることになってございます。

もう少し構造をご説明しますと、この圧力容器を支えているこのコンクリートの土台ですが、円筒形なんです、こちらを我々はペデスタルと呼んでおりまして、ペデスタルの上部とか下部という言い方をしますが、そういったことで、燃料デブリの試験的取り出し、最初のテレスコ式を取り出したときは、手前側ですね、ここにグレーチングという網がのっていますが、こういったところから燃料デブリの粒、一番最初に2号機で、ここに模型がございまして、燃料デブリを取ったときは、この一番手前のところからテレスコ式装置を落としまして、この燃料デブリを取り出しました。

2回目、テレスコ式装置でもう一個先のところから取り出しています。ロボットアームにつきましては、もう一個先の奥のところの調査をするという目的で今、準備を進めているところでございます。

ちなみに、今、2号機につきまして、下が茶色くなっていますが、こういったところに上から溶けて落ちてきた燃料デブリがたまっている。このたまっている状況につきましても、ある程度想定でつくっていますので、ここの再現はある程度イメージだと思っていただければと思います。

こちらのエンクロージャでございまして、長さは大体9mぐらいありまして、中に蛇腹式のロボットアームが入っています。この蛇腹式のロボットアームが今、長さが8mぐらいいいんですが、これをずっと伸ばしていくというところを少し実演でお話しさせていただければと思います。

実際ここは金属製なので透明ではないですが、これはある程度模型なので中身が分かるように透明にさせていただいております。伸ばすのも、先ほど、本当は完全に遠隔といいまして、プログラムで伸ばしていくんですが、そこまで再現できないので、人が黒子になって伸ばさせていただければと思います。

こちらはロボットアームですが、かなり幅が大きいので、このX-6ペネといいますのが直径が60センチ、内径が55センチの穴でございまして、非常に狭い穴でございまして、今、このエンクロージャを据え付ける準備をしているところが今の現状の2号機でございまして、これから準

備が整えば我々は夏ごろにアームを伸ばしていきます。今アームが伸び始まったというイメージですが、ここに隔離弁というのがございます。この隔離弁をあけて、このロボットアームがこの先端が通過するとき、これが調査の着手でございます。

もう今入りましたから着手したということで、これが今我々、夏頃を目指してございます。実際、これは模型なのでそのまま突っ込めますが、実際は滑り台のようなもの、CRDレールというものがロボットアームが入るときに邪魔になりますので、まず一番最初にやることは、これを突っ込んだときに先端でこの滑り台の部分を少しカットする必要があるございます。これがアクセスルートの構築というものでして、今こういったところでレールを切りながら前に進んでいるということになります。

実際こちらのパイプも透明ではございませんので、横からは見えない状況になります。今、蛇腹式のロボットアームが伸びましたかね。今伸びまして前に進んだところでございます。我々がロボットアームと呼んでいますのはこの蛇腹式に折り畳んでいるようなところでございまして、この先はテレスコ式、もともと先ほど言ったテレスコ式というのは全体がこういった形で伸び縮みするような棒が入っているんですが、こちらのロボットアームの場合は、ロボットアームの先端が少しテレスコ式で、チルトといいまして、左右に動いたり上下に動いたりとか、こういったふうに動くようになっていまして、実際、伸び切った後にチルトで少し折れます。折れて、下に向きます。

実際、上に向いたり下に向いたりできるんですが、下に向きまして、この丸い棒ですが、これはワンドというんですが、最後はこのワンドで中に先端、軸を持っていくような形になります。

テレスコ式の場合は、先端はグripperといいまして、つまみしかできないので、燃料デブリの粒をつかんでいくということしかできませんでしたが、ロボットアームの特徴としましては、このワンドの先端に付いている装置をいろいろ付け替えることができます。この付け替えるのは、先ほど言ったように、アクセスルートの構築をするときは、ブラストといいまして、鉄粉のようなものを水と一緒に噴射して金属を切っていくようになるんですが、その他は、我々、まずはこの切った後は炉内の構造の調査をやりたいので、ここの3D化をしたいんですね。どこに邪魔なものが、干渉物がついているかというのを実際パソコンの上で3D化しまして、それを避けるようにプログラムを組んで自動で伸びていくようなことをするための情報を得たいと考えてございます。ですので、我々の主目的としましては、アクセスルートの構築と中の3D化のためのマッピングみたいなものをつくるのが主目的でございます。

それを達成しましたら、先端治具を付け替えまして、この燃料デブリの取り出しをしますとか、

あとは線量測定、ガンマ線や中性子線の測定、あと映像です。実際の動画とか静止画を撮れるような形で、先端治具を付け替えながらやっていくというふうに今考えてございます。

私からの説明は以上でございますが、何かご質問等はございますでしょうか。

【浪江町 佐藤 秀三】

先端部を交換するのは、遠隔操作か人か。

【東京電力福島第一廃炉推進カンパニー 廃炉コミュニケーションセンター 桑島副所長】

そうです。これは、伸び縮みすると申し上げましたが、これを交換する場合は、全部、先ほど一番最初に畳んだときのように、先端も含めて奥まで持って帰りまして、ここに、ないんですが、双腕マニピュレータといいまして、2本の腕を持った遠隔操作ロボットがございます。この遠隔操作ロボットでここを、ネジとかついていますが、そういうのを外して交換することができます。

【浪江町 佐藤 秀三】

その遠隔操作する人というか作業員は、この模型でどの辺にいるんですか。

【東京電力福島第一廃炉推進カンパニー 廃炉コミュニケーションセンター 桑島副所長】

線量がないところにいます。

【川内村 遠藤 眞一】

この装置の主な目的は、CRDレールの切断・除去、それから、中のデブリの取り出しも可能なんですか。

【東京電力福島第一廃炉推進カンパニー 廃炉コミュニケーションセンター 桑島副所長】

そうですね、デブリの取り出しも可能です。ただ、我々が一番最初にやりたいことは、まずこのロボットアームを入れるためのルートをつくらないと、まずこのロボットアームが中に入らないので、CRDレールという滑り台みたいなものを切ります。あとは電線管とか、細かい話でいうと何かほかの構造物がありますので、そういったものも最初に先端ツールで切りながらルートをつくっていきます。

【東京電力福島第一廃炉推進カンパニー 飯塚燃料デブリ取り出し総括】

すみません、飯塚と申しますが、補足させていただきますと、今回デブリを取るとしてもごく少量になりますが、この装置の次にもうちちょっと大きいといいますか、力の強い装置を入れまして、今度は連続的に取り出して保管していくことを次のミッションとして考えています。

そのためにはルートを作っていくということと、特にこの辺の入れるところのデータをしっかりデジタルで取っておきたい。そうすることによってプログラムができますし、あと装置の開発にもものすごく役に立つということと、ルートを作るこの辺のデータをきちんと取っておくということが非常に重要になります。

【川内村 遠藤 眞一】

最初のデブリ取り出し、本当にグラム単位で取り出しましたね。我々素人から見ると、グラム単位かと感じたんです。この装置だと、最大何キロぐらいまでつかめるんですか。

【東京電力福島第一廃炉推進カンパニー 飯塚燃料デブリ取り出し総括】

この装置ですと、やはりグラム単位になります。同じです。ですが、先ほど申しましたとおり、この次の装置というのは、グラム単位を超えてキロ単位を取りにいくような装置であって、しかも、取ったデブリをきちんと周りに自動で運んで保管していくというようなシステムを今検討しております。

【川内村 遠藤 眞一】

確かに難しい作業ですが、何とかそういった装置・治具が出来上がって、そしてデブリの取り出しが早急に進められるように期待しています。

【東京電力福島第一廃炉推進カンパニー 飯塚燃料デブリ取り出し総括】

しっかり一步一步進めてさせていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

【福島県観光物産交流協会 守岡理事長】

観光物産交流協会の守岡と申します。

この模型で、具体的にこうだというものを示していただいて非常に分かりやすいなと思いました、正直。今まで図面とか紙では絶対分からないようなものが感覚的に分かって、このやり方は

とてもいいなと思いました。

ご提案です。こういった模型を使って、サイト内に入れない方等に説明していただけないか、例えば檜葉のモックアップ施設等で、ドローンを飛ばしてもらって同じような説明を来ていただいた方にしていただくと、短時間で非常に分かりやすいと思われます。

先ほどの方からもあったとおり、まだまだ正直言ってこのデブリの取り出しもかかりますよね。その間、やはり我々のほうで一番懸念しているのは、風評被害とか風評払拭であり、何をしなくちゃいけないかと言うと、正確な情報発信です。短時間でこういったことをやれば非常にご理解いただけます。

当協会のホープツーリズムでも年間1万9,000人の方がいらっしゃいますので、そういった方に、サイト内に入れないときはこういったもので説明していただけるような時間をつくっていただけると非常にありがたいなと思っています。

ご検討をよろしくお願いしたいと思います。

【東京電力福島第一廃炉推進カンパニー 廃炉コミュニケーションセンター 桑島副所長】

ありがとうございます。我々も非常に、自分自身もこれを作ってすごく分かりやすいなと思っています。作った担当者、非常に今コメントをいただいて喜んでいると思いますが、いただいた意見、前向きに検討させていただきますのでよろしくお願いします。ありがとうございました。

【福島県観光物産交流協会 守岡理事長】

よろしくお願いします。

【東京電力福島第一廃炉推進カンパニー 廃炉コミュニケーションセンター 桑島副所長】

他にございますでしょうか。

【牧田議長】

それでは、引き続き東京電力から説明をお願いします。

【東京電力福島第一廃炉推進カンパニー 廃炉コミュニケーションセンター 桑島副所長】

それでは、東京電力の桑島から引き続きご説明を続けさせていただきます。

資料の33ページ目をお願いいたします。前のモニターにも表示させていただいておりますが、

3号機の今回はマイクロドローンによる原子炉格納容器内部調査というものでございます。

次に、34ページ目をお願いいたします。こちらは参考として用語解説を入れてございますが、先ほど模型でもご説明したので詳しくはご説明しませんが、原子炉建屋、原子炉格納容器（PCV）、原子炉压力容器（RPV）、ペDESTALの説明をさせていただいております。

続きまして、35ページ目をお願いいたします。3号機のPCV内部調査についてご説明させていただきます。

36ページ目をお願いいたします。調査の概要でございますが、3号機は本格的な燃料デブリ取り出しに向けまして、原子炉格納容器（PCV）の情報収集が必要となります。今回は、写真にもございますが、マイクロドローン、手のひらサイズと我々と呼んでいますが、こういう非常に小さいドローンを使いまして、先ほど2号機でもロボットアームを挿入してございましたが、同じX-6ペネより少し上にあります、少し細い直径140ミリ、14センチのX-53ペネというところからマイクロドローンを入れまして、2017年に小型水中遊泳型、水中ドローンを使って調査したペDESTAL内の①、中心の部分でございますが、ここの詳細調査及び未調査、今まで調査をしたことのないドライウェルの1階②という四角で囲んでいる部分、こちらからドローン調査をやるものでございます。このために、原子炉の絵にございますように、水の部分、水位を下げまして、ドローンを飛ばして確認したというものでございます。

37ページ目をお願いいたします。調査の際には、このX-53ペネに、左の図で示しました、これも密閉機能のございますシールボックスというものを取り付けまして、PCVと外部の隔離状態を保ったまま、マイクロドローンをPCV内に挿入します。また、シールボックスの中には合計6機のドローンが格納されておまして、このドローンを運搬するインストール装置、左下の絵でございますが、このドローンをのせて前後する装置でございますが、ここには先端に一度に2機のドローンが搭載できる離発着台がございます。この離発着台をPCVの中に入れてからマイクロドローンが離発着いたします。

38ページ目をお願いいたします。調査の計画についてでございます。

39ページ目をお願いいたします。今回の調査では、今後の堆積物調査や燃料デブリ取り出し横アクセスで重要となりますX-6ペネ周辺やペDESTAL内の情報収集を主目的としておまして、映像や線量率、あと点群データといいます3D画像の元データになるようなもの、こちらの情報を取得する計画としてございます。

40ページ目をお願いいたします。作業員の被ばく量やドローンの耐放射線性を踏まえまして、ドローンの運用方法について策定をしております。インストールといまして、この装置の中

に入れる作業は1日1回としまして、2機のドローンで、同時には飛びませんので、各機1回ずつ、1日当たり2フライトの計画としてございます。

41ページ目をお願いいたします。実物大の模型を用いまして、事前の模擬訓練、モックアップの結果を踏まえまして、各フライトごとの調査内容、飛行ルートを策定しております。調査期間は11日間で、最大フライト数は21回の計画としてございます。こちらの表に記載がありますとおり、8日目以降は、それまでの調査結果を踏まえまして調査内容を決定することといたしております。

42ページ目をお願いいたします。調査結果について説明いたします。

43ページ目をお願いいたします。調査実績としましては、計画どおり、11日間で合計21フライトを実施しております。今回の調査では、主目的であります燃料デブリ取り出し工法検討に重要な情報の取得や、その他計画していた着目点についても調査を実施することができました。

1ページ飛びまして、45ページ目をお願いいたします。左の図に示してございます格納容器内部のペデスタル外周部、黄色い点線のところでドローンが飛んでいますが、こちらの調査結果でございますが、写真の①から④に示してあるとおり、内部の映像を見ますと、さびなどはありますが、大きな損傷や崩れているような干渉物は確認されておりません。また、1号機と同様に、ペデスタルの外でも靄、霧みみたいなものが確認されております。また、X-53ペネ近傍の線量率は0.6 Gy/h、1時間当たり0.6 Gyでございました。

46ページ目をお願いいたします。①の写真のとおり、PCVの貫通部でありますX-6ペネ周辺を見ましたが、干渉物は確認されておりません。②の写真のとおり、X-6ペネの中に、ドローンが中に入って撮影してございますが、ここにもケーブル等はございましたが、今回撮影した範囲では、2号機で確認されたような堆積物は確認されておりません。③、④の写真でございましてCRD交換用開口周辺についても、干渉物は確認されませんでした。

47ページ目をお願いいたします。今回の3号機のマイクロドローン調査（ペデスタル外）の動画をご覧ください。こちらは1分50秒ほどの映像がございます。

ペデスタルの外でございます。これからドローンが離陸したところでございます。離陸してすぐ反対側を向きますと、上にドローンの発着台、インストール装置が見えます。こちらから今度、真下にはX-6ペネが見えますが、最初左側に向けて、ペデスタル側に、中心部のほうに飛んだというものでございます。X-6ペネの外観と内部でございまして、これを飛んで、今、外側に向かって飛んでいるところですが、CRDレールの上を今ドローンが飛んでいます。そうしますと、このX-6ペネの円形の穴の入り口が見えてきます。ここのところですね。X-6ペネと書

いています。

今、X-6 ペネの中に入りましたが、ケーブルがいっぱいありますが、これはもともとこのケーブルは中に入っていたものだと思います。それがそのまま今残っている状況でございます。あと、CRD交換用の開口、外側から内側に向かって今飛んでいるところでございまして、このCRDレールは下にあるんですが、ペDESTALの中の見えませんが、周りに特に干渉物等はないことがお分かりになると思います。

続きまして、49ページ目をお願いいたします。こちらは左側の図に示しました格納容器内部の今度はペDESTALの中ですね、圧力容器の下部分でございますが、調査結果でございますが、①から③の写真にありますとおり、CRDハウジングはもともと上にくっついていますが、それをとめていたCRDハウジングサポートというものが①の写真で、上から下に落ちてきているというものですとか、あとCRガイドチューブというのが②にございますが、もともと原子炉圧力容器の中にあつたと思われるものが下に落ちてきているということを確認してございます。そして、CRDハウジングのところを見ていただくと、真ん中の②の写真に堆積物とか付着物を確認しておりますので、燃料デブリの可能性のあるようなものが見られるというものでございます。ここでも1号機と同様に、ペDESTALの中でも靄、霧のようなものが確認できてございます。

次、お願いします。次もまた動画をご覧くださいますが、今回はペDESTALの中に入ったところの動画をここでご覧いただきます。1分30秒ほどの動画になります。

今、中心方向に向かって飛ぶところでございます。今飛んだところでございますが、CRDハウジングサポートとかが見えておりまして、下に堆積物。水の水面がここまで水位を下げてございますので、これは計画的に下げた水面でございます。同様に反対周りで飛んでございますが、下に堆積物と、目の前にCRガイドチューブというのが見えます。上にくっついてるのは、我々は下にたまっているのを堆積物、上にくっついてるのは付着物と呼んでございます。こちらは、燃料デブリの可能性のあるものでございます。また反対側から飛んだ映像でございます。同様に、目の前に上から落ちてきたと思われるCRガイドチューブがでございます。堆積物も見えます。

続きまして、51ページ目をお願いいたします。こちらの図に示したとおりで、原子炉圧力容器RPVの底部の調査結果でございますが、写真のとおり、このRPV圧力容器底部の破断面の可能性のある構造物やそこに横たわるCRガイドチューブを確認してございます。このRPV底部の破断面といいますのは、イメージでいいますと、ほぼ鍋底みたいなものがあつたのが、

先ほどの説明にもありましたが、燃料デブリ、燃料が溶融したところで、上から落ちてきて穴があいた。その穴が空いた破断面ではないかと我々は考えています。可能性と言わせていただきますが、そういった構造物が見えているのではないかと考えておりまして、さらにこの上部にも空間があると。穴が空いているということは、上に空間があるということを推定してございます。ただ、このドローンですが、前しか撮れないので、上向きに飛ぶということはドローンはできませんので、上を向いた状態ではないんですが、こういったところで画像から3Dの、要はパソコン上のデータに変換をしまして、実際のサイズとか距離というのをはかることができますので、今そういった処理をしているところでございます。

次、お願いいたします。次も、動画をご覧くださいますが、今回の3号機のマイクロドローンの原子炉圧力容器の底部付近までドローンが飛んだという動画をご覧ください。1分弱の動画となります。

原子炉圧力容器の底部付近にドローンが今上昇して飛んでいるというものでございます。先ほどの資料と一緒に、この圧力容器RPVの底部の部分に破断面と見られる構造物が周りに見えてございます。CRガイドチューブのところも、本来縦にあるものが横になっているというものでございます。ドローン自身は、多分同じところの高さを飛びながら、自分がぐるっと回転しているような状況で画像を撮っているところになります。CRDハウジングと書いてありましたが、あれはもともとあったような状態のところ、あそこは特に崩れていないのではないかと考えております。

最後、53ページ目をお願いいたします。今後の予定でございしますが、取得した映像を用いていろいろな分析を実施する予定でございします。まず、この表に書いてございしますが、構造物の特定としまして、取得した映像と設備図面、事故前の写真を比較しまして、構造物の特定を実施します。映像からの点群化につきましては、ペデスタル内外で取得した映像を用いまして、情報を3D化するための点群データというものを作成します。線量率測定につきましては、X-53ペネ付近で測定しました線量率と映像の放射線ノイズを比較しまして、ペデスタル内外の線量率を推定いたします。

また、本調査で取得しましたPCV内の情報や知見として、下の表に3つ書いてございしますが、カメラの曇り止め効果やPCV内の通信性などを整理しまして、今後の内部調査に反映していきたいと考えてございします。

私からの説明は以上となります。

【牧田議長】

ありがとうございました。

それでは、ただいまの説明につきまして、ご意見、ご質問があれば出していただきたいと思います。どうぞ。

【飯舘村 高橋 世津子】

飯舘村です。今日は本当に模型を使ったり動画を見せていただいて、以前よりもとても分かりやすい説明だったと思います。そして、こういう動画とかを学校の子供たちにも見せたいなど、私は思いました。

ちょっと疑問なんですが、そのドローンなんですが、汚染された場所にこうやって活躍して入っていくわけですが、その使ったドローンは汚染されているわけなんですよ。その後、廃棄処分なさるのか。どういう、機材そのものも含めて廃棄処分されるのでしょうか。

【東京電力福島第一廃炉推進カンパニー 飯塚燃料デブリ取り出し総括】

飯塚からお答えいたします。

使った機材については、汚染された廃棄物として保管することになります。他の廃棄物と同様の扱いになります。

【飯舘村 高橋 世津子】

保管していくと。

【東京電力福島第一廃炉推進カンパニー 飯塚燃料デブリ取り出し総括】

保管庫に保管していくことになります。

【飯舘村 高橋 世津子】

ドローンはこういうふうに飛ばした場合、失敗したりとか中に落ちたりとか、そういうこともあろうかと思うんですが、大体何台ぐらい、今まで使ったのでしょうか。

【東京電力福島第一廃炉推進カンパニー 飯塚燃料デブリ取り出し総括】

今回の場合は、全台、無事帰還しておりますので、中に今回のドローンは落ちて残置されてい

るものはございません。

【飯舘村 高橋 世津子】

ありがとうございます。

【東京電力福島第一廃炉推進カンパニー 廃炉コミュニケーションセンター 桑島副所長】

東京電力の桑島ですが、1点補足ですが、動画を他に見せたいというお話をいただきましたが、こちらの動画につきましては弊社のホームページに掲載してございます。また、燃料デブリポータルというページも我々のウェブの中にごございますので、「燃料デブリポータル」と検索をかけていただければそこに到達できると思いますので、よろしければご活用いただければと思います。

【川内村 遠藤 眞一】

2点ほど教えてください。まず、先ほど言ったドローンなんですが、ドローンの飛行経路というのはもうあらかじめプログラムされて飛んでいるわけですか。遠隔操作というのはなかなかできないような環境だと思うんですが。

それからもう1点は、冷却水がペデスタルの下のほうにありましたが、あの冷却水は循環して冷却しているのでしょうか。その2点、教えてください。

【東京電力福島第一廃炉推進カンパニー 飯塚燃料デブリ取り出し総括】

飯塚からお答えします。

まず第1点、ドローンですが、こちらは自動のプログラムではなくて、オペレーターが映像というか、ドローンのカメラを見ながら手動で操作をしています。なので、遠隔手動操作という形になります。

【川内村 遠藤 眞一】

あれだけの、例えば鉄板の厚さとかコンクリートとか、僅かな隙間から電波がドローンに届くわけですか。

【東京電力福島第一廃炉推進カンパニー 飯塚燃料デブリ取り出し総括】

電波については、申し訳ございません、40ページをご覧ください。このドローンを運んでいる

装置がございますが、この装置の中に電波を発信する機能がついておりまして、これを格納容器の中にある程度入れます。この電波をドローンが拾って飛行していくということになりまして、したがって、電波の、ある意味、届いてドローンがきちんと運転できる範囲で今回調査をしたということになります。なかなか裏側といいますか、複雑なところに電波が届きにくくなるので、そこはオペレーターの方の判断といいますか、何%以下になったらもう飛ぶのをやめようみたいなことを最初から決めておいて、きちっと戻れるようにということでオペレーションしてございます。

あと、申し訳ございません、2点目の冷却水に関しましては、基本的には冷却水を入れまして、それを回収して浄化をしてもう一回原子炉に戻して、循環させているという状況でございます。

加えますと、今回はドローンを飛ばしてこういう映像を撮るという観点で、飛ばしている最中につきましてはある意味障害になりますので、冷却水を一時的に止めています。そして、この映像を撮ったということです。当然、この間、温度がどういうふうになっていくか、どの程度上がるのかというのは事前に評価をした上で、何時間ぐらい止めていくというのは計画してやっておりますし、問題ない範囲で当然オペレーションは実施してございます。

【福島県観光物産交流協会 守岡理事長】

観光物産交流協会の守岡です。

確認させていただきたいんですが、以前の知識ですが、こういった高線量の中にロボットを入れたときに、あまりにも高線量過ぎてロボットが止まったとか、大変な状況になってしまった記憶があります。この劣悪な環境の中、こういった高線量の中でドローンを飛ばせる技術というのは、これは世界にあるものなんですか。それとも、今回初めてなんですか。

【東京電力福島第一廃炉推進カンパニー 飯塚燃料デブリ取り出し総括】

飯塚からお答えいたします。

まず、高線量の中で動作ができないとか不具合が起きる原因というのは、基本的には概ね、半導体が放射線で駄目になるというのが大体主な原因になります。今回のドローンでいくと、大体1フライト当たり10分ぐらい、10分から10数分で、それは主にバッテリー、非常に小さくて軽いドローンなので、一番重たいのはバッテリーになります。そのバッテリーの容量で大体決まってしまう飛行時間になりまして、そのぐらいの時間ですと、積んでいるカメラがやられるというまではいかないというのがこのドローンです。

長時間、例えば先ほど2号機のロボットアームのところでご説明をちょっと失念してしまったんですが、ロボットアームの場合には、全部のオペレーションをすると大体半年ぐらいかかると思っています。先ほどのアクセスルートの構築から始まりまして、映像のデータを撮ったりとか、デブリを少し採取したりとか、中性子線、ガンマ線とか。順調にいつて半年ぐらいいと。そうすると、それなりの長さでオペレーションしようとする、やはり半導体で特にカメラが、今、小型のカメラは半導体式ですので、これがかなりやられるというのが分かっています。

ちょっと補足させていただきますと、以前、テレスコ式で少し取り出したときに、カメラの不具合があったというのをご報告させていただいていると思いますが、それに従いまして、今回、我々、自前で何台か、何種類かあるカメラのテストをしていて、中にはメーカーのスペックどおりの耐放射線性が出ないカメラもありまして、それは少しスペックが落ちるけど、きちんと性能が出るものに変えたりしています。中にはちょっと変えられないものもございまして、そういう制約については、なくてもちゃんとオペレーションができるように手順や訓練などは積んでいくという状況ですので、概ね、やられるのは半導体の中に入る、長時間入っている状態だにご理解いただきたいと思います。

【福島県観光物産交流協会 守岡理事長】

なぜこんな質問をしているかというと、先ほども述べたんですが、まだまだこの廃炉には時間がかかると。その間、いろいろ情報発信とか風評対策、そのためにも、こういった最先端の技術も生まれつつあるんだと。技術開発をして、この地域から世界に向けてどんどん新しい技術を世界に汎用性があるようなものをどんどん広げていくんだという情報発信ができると非常にありがたいなと思っているんです。いろいろ大変な部分だけじゃなくて、こうやって新技術、F-R E I もそうですし、イノベもそういった中の一環として、こういった技術もあるんだということと一緒に情報発信していただけると、福島県に来られた方が、そういった最先端のことをやっているのかという新たな認識で、いろいろ福島県を見る目が変わってくるのかなと思ったものですから、こういった映像など、先ほどの模型にプラスしてご説明いただくと非常にありがたいなと思っているんですが。参考までにということ。

【東京電力福島第一廃炉推進カンパニー 飯塚燃料デブリ取り出し総括】

ありがとうございます。こうしたドローンの、このぐらい小型のドローンというのも、このメーカーさんと一緒に開発させていただいた特殊なドローンですし、あと、先ほど申しました半導

体についても、高性能の半導体の検討も進めておりますので、そういうところも含めていろいろ発信させていただければと思います。ありがとうございます。

【牧田議長】

ほか、いかがでしょうか。

【川俣町・菅野】

川俣町の菅野ですが、ペDESTALのところに靄が発生している理由ですが、これは冷却水を少なくしたから内部の温度が上がって靄が発生したということなんでしょうか。

【東京電力福島第一廃炉推進カンパニー 飯塚燃料デブリ取り出し総括】

飯塚からお答えいたします。

基本的には、大体、格納容器の中、ずっと計測し続けておりますが、30度から40度ぐらいの温度でございますので、しかも、中は湿潤環境といいますか、水がある環境ですので、基本的には常に靄が発生している状況だにご理解いただいたほうがいいかなと思います。

【牧田議長】

それでは、オンラインで参加していらっしゃる新堀先生、いかがですか。

【国立大学法人東北大学 新堀教授】

ありがとうございます。3点ほど確認をさせてください。

31ページ目の左下で、3Dの結果というのは、具体的にどこを見ているのかを確認したいのが1点と、それから今出ていた40ページにありますマイクロドローンについてですが、サイズは私の認識ですと、手のひらサイズで、重さとしては大体、バッテリー含めて100グラム程度かなと思っていますのですが、40ページの下の方面ではサイズが書いていないので、補足いただければと思います。3点目は、45ページ目にあった線量率ですが、この値もかなり高いのですが、想定どおりだったのかを確認させてください。

以上3点でございます。

【東京電力福島第一廃炉推進カンパニー 飯塚燃料デブリ取り出し総括】

飯塚からお答えいたします。

まず、2点目のサイズですが、申し訳ございません、36ページをご覧ください。ご説明が失念していたかもしれません。マイクロドローンのサイズは、大体130ミリ×120ミリ、手のひらに乗るぐらいのサイズ。

【国立大学法人東北大学 新堀教授】

手のひらサイズぐらいですね。

【東京電力福島第一廃炉推進カンパニー 飯塚燃料デブリ取り出し総括】

ご理解ください。

【国立大学法人東北大学 新堀教授】

重さは100グラムぐらい。

【東京電力福島第一廃炉推進カンパニー 飯塚燃料デブリ取り出し総括】

おっしゃるとおりで、バッテリー込みで95グラム、100グラムないぐらい。

【国立大学法人東北大学 新堀教授】

それは40ページ目に書いてある下側の図面で、全体のサイズは、手のひらサイズの7～8倍の大きさということで見ていいのですか。

【東京電力福島第一廃炉推進カンパニー 飯塚燃料デブリ取り出し総括】

装置全体の話ですよね。そういうご質問でよろしいでしょうか。

【国立大学法人東北大学 新堀教授】

はい、そうです。

【東京電力福島第一廃炉推進カンパニー 飯塚燃料デブリ取り出し総括】

これはそのまま縮尺しているだけですので、縮尺というか、小さくしているだけですので、先

生おっしゃるとおりです。

【国立大学法人東北大学 新堀教授】

ありがとうございます。今回いろいろとご説明を工夫されて非常に分かりやすかったのですが、あえて言わせていただくと、資料においてサイズとかを、あわせて示していただくと、理解がさらに深まるかと思いましたので、それについて言わせていただきました。

【東京電力福島第一廃炉推進カンパニー 飯塚燃料デブリ取り出し総括】

分かりました。申し訳ございません。もうちょっと資料のほうは考えさせていただければと思います。

1つ目の質問で、31ページの3次元形状データ、ここにも記載してございますが、ペDESTALの開口と記載してございます。位置的には、真ん中の絵にございますとおり、円筒形の鉄筋コンクリートの原子炉圧力容器を支えているペDESTALに開いている開口部を示してございます。

【国立大学法人東北大学 新堀教授】

これもこの3Dの形状データのサイズが書いていないので、それがどういうふうに見えるのかというのが、書いている側は分かると思うのですが、どこをどう見ているかが分からなかったの、そこら辺をうまく工夫していただけるとありがたく存じます。

【東京電力福島第一廃炉推進カンパニー 飯塚燃料デブリ取り出し総括】

申し訳ございません。ちょっと不親切で、非常に恐縮でございます。

【国立大学法人東北大学 新堀教授】

この白い点線で囲まれている枠というのは、大体サイズはどのぐらいになりますか。

【東京電力福島第一廃炉推進カンパニー 飯塚燃料デブリ取り出し総括】

ちょっと感覚的な話で申し訳ございませんが、人が入るぐらい、若干かがんで入るぐらいですかね。

【国立大学法人東北大学 新堀教授】

分かりました。かなり大きいですね。

【東京電力福島第一廃炉推進カンパニー 飯塚燃料デブリ取り出し総括】

70×50とかだったかなぐらい、そのぐらいのイメージです。

【国立大学法人東北大学 新堀教授】

右側を書いてある黄色い破線ぐらいの大きさよりちょっと小さめという感じですか。

【東京電力福島第一廃炉推進カンパニー 飯塚燃料デブリ取り出し総括】

黄色の破線と基本は一緒のつもりで書いてはいるんですが。

【国立大学法人東北大学 新堀教授】

そういうことですね。はい、分かりました。ありがとうございました。つながりました。

【東京電力福島第一廃炉推進カンパニー 飯塚燃料デブリ取り出し総括】

あともう1つ、45ページに記載がございますX-53ペネ、今回ドローンを入れたところの線量率、 0.6 Gy/h が想定どおりかというご質問かと認識してございますが、なかなかちょっと一言でお答えするのは難しいところでございますが、大体、各号機、このぐらいの位置だと数 Gy/h ぐらいなので、逆に言うと数十とか数百ではないという意味ではこんなところかなという感じでは僕自身、若干個人的な見解になってしまって恐縮ですが、思っております。

【国立大学法人東北大学 新堀教授】

私自身も数 Gy/h ぐらいかなと思っておりまして、それより1桁小さいと思った次第です。測定の精度は様々な要因がありますので、ここで質問させて頂きました。

このような数値を出すときも、やはりどのぐらいのものなのかということもあわせてご説明していただくと、聞いている側、見ている側は分かりやすいかなと思いました。

以上です。

【東京電力福島第一廃炉推進カンパニー 飯塚燃料デブリ取り出し総括】

分かりました。ご指摘ありがとうございます。確かにこれ、少しでも格納容器に入ったところですので、そういった位置的な影響等、あと2号機とかであるともう少し高めの数字だったかと思いますので、その辺もいろいろこれから考察検討させていただきたいと思います。資料に関しましても、先生ご指摘のとおり、さらにもっと工夫させていただければと思います。ありがとうございます。

【国立大学法人東北大学 新堀教授】

ありがとうございました。

【牧田議長】

そろそろ時間になってきました。

【富岡町 石黒 洋一郎】

すみません、次第にその他がなかったんですが、その他ということで質問してもよろしいでしょうか。富岡町の石黒です。

5月29日に竣工しました大熊ダイヤモンドデバイスについて教えていただきたいんですが、普通、ダイヤモンド半導体というとパワー半導体なんですが、話を聞いていると、もしかすると、ロジック半導体なのかなと思ったんですが、パワー半導体という前提でお話をさせてください。

高線量下で使用するパワー半導体として研究してきたダイヤモンド半導体ですが、その特性からほかにも流用できるものではないかと期待しております。具体例としましては、今月、ナスダックで史上最大の時価総額280兆円規模で上場する見込みのスペースXは、宇宙に大量のデータセンターを打ち上げるとのことですが、高線量下、高出力に耐えられるダイヤモンド半導体は需要として大きいのではないかと思います。

また、かつて檜葉町に誘致しました福島SiCですが、シリコンカーバイド製のパワー半導体では目標とした出力が出ず、6門式のBNCTが行き詰まったと聞いています。現在では残念ながら名前を変えて中国の資本になったと聞いておりますが、ダイヤモンド半導体を用いれば出力問題を解決し、新型のBNCTの製作及びそれに伴った新たな選択肢になるがん治療が生まれるのではないかと私は期待しております。

このほか多くの需要があり、福島復興、被災地復興の象徴となる力を秘めているものと思うの

ですが、経産省としてはどのようにこれを位置づけ、育成していくか、どのように産業とくっつけていくか、そういった見解についてお聞きしたいと思います。よろしくお願いします。

【資源エネルギー庁 加賀原子力発電所事故収束対応室長】

経済産業省でございます。ご質問ありがとうございます。

大熊ダイヤモンドデバイスにつきましては、これまでも研究開発の支援等させていただいてございまして、先日、おっしゃるとおり竣工式もあったところですが、おっしゃるように、いろんな活用、やり方があるのではないかと考えております。引き続き、大熊町ともよくお話を聞きながら、できる支援をしっかりとやっていきたいと考えています。

【富岡町 石黒 洋一郎】

分かりました。また次回、お話をいろいろ聞かせていただければと思いますので、資料作成等、よろしくお願いいたします。

【牧田議長】

ほか、いかがでしょうか。

【福島県老人クラブ連合会 鈴木会長】

その他でよろしゅうございますか。今日の出席者について、事務局さんにお尋ねしたいんですが、私も欠席ばかりしていてこんなことを言う資格はないと思うんですが、各種団体15あるうち5団体しか出席されておりません。このことについて、事務局はどのようにお考えなんですか。よろしければお聞かせいただきたいと思います。

【事務局】

事務局でございます。まさしくご指摘いただいたとおり、15分の5というような形で、出席率は芳しくないところがありますので、今後も通知を出した際に、例えば欠席とかの場合に、何とか代理でも出席いただけませんかとか、そういった形でも、ぜひ多くの方に出席いただいて、活発な意見交換というのができるような形で事務局としても取り組んでまいりたいと思っておりますので、現状、このような出席率になっているということは、こちらとしてもぜひ皆さんに出席いただきたいなという考えであることは一緒でございますので、今後どういったことができるか

ということは検討してまいりたいと思います。ありがとうございます。

【牧田議長】

ぜひ最後に一言という方がいらっしゃれば。よろしいでしょうか。

それでは、本日も皆様から様々なご意見をいただき、ありがとうございました。本日の会議のまとめということで、私から3点ほどお話ししたいと思います。

1つ目は、廃炉作業の安全の確保についてです。本日も、廃炉作業の進捗について説明をいただきました。燃料デブリの取り出しに向けた調査など、難しい作業が続いています。引き続き、安全を最優先に緊張感を持って取り組んでいただきたいと思います。

2点目ですが、分かりやすい説明の工夫についてです。前回の会議では、廃炉作業の全体像や現場の状況について、より分かりやすい説明をお願いしたところでありました。本日は、既に出席者の方からも声が出ていますように、ロボットアームの模型、ドローンによる原子炉内の動画、それからドローンの実物、こういったものを活用していただいて、より分かりやすく現場の状況が具体的にイメージしやすくなったと感じております。廃炉は長期にわたる取組となりますので、今後も県民の理解につながるよう、見える化の工夫を継続していただきたいと思います。

3つ目は、情報発信についてです。廃炉作業は着実に進んでいるようですが、その内容が国民や県民に十分伝わらなければ、不安や誤解、さらには風評といった事態を招くことにもなります。東京電力及び国には、引き続き正確で分かりやすい情報発信に努めていただきたいと思います。

私からは以上となります。

それでは、事務局にお返ししたいと思います。

【事務局】

ありがとうございました。

本日の議論や資料につきまして、追加のご意見やご質問などがございましたら、回答様式にご記入いただきまして、配付しております返信用封筒にて、6月24日の水曜日までに事務局までお戻しいただければと存じております。

また、次回会議の開催に向けました議題の設定の参考としたいので、配付しておりますアンケート用紙をご記入いただきまして、記入後は机に置いたままお帰りいただいて結構です。

以上をもちまして、令和8年度第1回福島県原子力発電所の廃炉に関する安全確保県民会議を終了させていただきます。

構成員の皆様、長時間にわたりありがとうございました。お忘れ物などないよう、よくご確認の上、お帰りいただければと思います。本日はどうもありがとうございました。